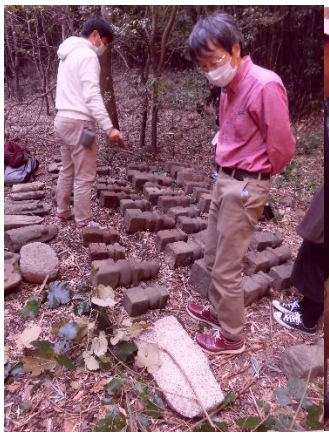
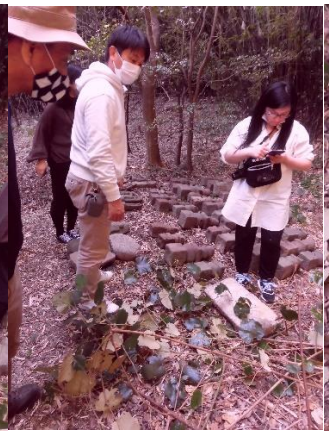
市史編さん便り

第 27 号　2021 年 2 月 22 日(月)発行
土佐清水市教育委員会生涯学習課
市史編さん室

土佐清水市内臨時石造物概要調査を実施！

2 月 20 日（土）に堺市博物館学芸課・海邉博史学芸員（文学博士）、芦屋市教育委員会生涯学習課・森山由香里学芸員、阪南市在住石造物研究家・三好義三さん、京都大学大学院博士課程・藤井佐由里さんら４名の石造物研究者が土佐清水市を来訪し、中世～近世の石造物の概要調査を実施した。

特に、加久見地区矢熊地区（泉慶院跡）と香仏寺、爪白地区覚夢寺では、一石五輪塔のほぼ３分の２が和泉砂岩製の物であることが判明。また、地元で「三崎石」と呼ばれている砂岩製の石造物も市内に多く分布しているが、竜串海岸においてその採掘したと推定される場所の一つを特定することができた。この三崎石は神社の境内にある石段などにも利用され、その全容の解明につながる糸口となる発見である。

↑和泉砂岩石造物の研究家・三好義三さん。　↑加久見の和泉砂岩の一石五輪塔

「市史執筆のブレイクタイム(23)」溝渕政次郎（1866―1945）

伊豆田村塾の創立者・・・多くの人材を育成・輩出

溝渕政次郎は、慶応２年（1866）、幡多郡伊豆田村（後の下ノ加江村）で田村森助、寿加の３男として生まれた。７歳の時、寺子屋に入り、漢学に興味を持ち、13 歳で幡多中村（現四万十市中村）の医師・吉松純（1838―1908）に学んだ（註１）。

吉松純は、代々医師の家系であった。遠近恒斎に経書を学び、成長後に筑前国の亀井腸洲の門下として数年間修行し、さらに京都・岩垣松苗に学んだ。その後、中村に戻り、父より医術を教授された。洋学・漢学ともに精通し、多くの門下生を抱えた。政次郎は門下の中で頭角を現し、俊才との誉が高い弟子の一人であった（註２）。

その才をいち早く見抜いた当時・下ノ加江郵便局長・溝渕嘉三郎は、思う存分学問に専念させたいと、政次郎を自分の養子に申し受けた。これより溝渕姓となる。政次郎、14 歳の春のことであった。養父・嘉三郎は下ノ加江・小方地区で文久の頃より寺子屋を経営し、30～40 人の教え子を抱えていた。明治維新後、その実績を買われ、下

ノ加江郵便局長に任命されたのである。

政次郎は、15 歳の時に戸籍を 18 歳と偽り、教員検定試験に合格し、短期間教壇に立ったとのエピソードが伝えられる。その後、九州に遊学の旅に出たが、その途中２年ほどして病気となり、志半ばで帰省して療養生活を送ることになった。そのうち徐々に病気も快復に向かい、父が局長を勤める下ノ加江郵便局で働くことになる。その後、昼間は郵便局に勤務し、夜間は村内の青年を集めて夜学校を始めた。これが後に「溝渕義塾」と呼ばれる私塾となった（註３）。

夜学で実施された授業科目は、漢文・国語・歴史などがあり、下ノ加江村の前途有望な俊才がここに通塾した。この塾は明治 37 年頃まで続き、通塾生には後年、村の吏員・村会議員など郷土に貢献した有益な人材となった。その後、政次郎は養父の跡を継ぎ下ノ加江郵便局長となり、その見識の広さから幡多郡郵便局長会理事となる。女子教育の必要性を感じ、男女共学の私立青年学校を開校し、これに当時の村長橋本和三郎が共鳴し、村立「伊豆田村塾」として地域教育の拠点的な役割を果たした（註４）。

大正末期、政次郎の還暦を祝い、門下生有志が、「素江会」（政次郎の雅号が「素江」であったことから）を結成した。同会が昭和 17 年に発行した文集『溝渕素江先生』には、政次郎を「伊豆田聖人」と讃えている。この発行責任者には、大西正幹も名を連ねている（註５）。

政次郎の愛弟子・大西正幹は、幡多郡伊豆田村出身の弁護士であり、高知市議会議長や高知県議会議長を務め、大正 14 年の普通選挙法成立後初の昭和 3 年に行われた第 16 回総選挙にて立憲民政党から高知 2 区に出馬して当選した。ちなみに、同じ民政党から高知 2 区で当選したのは、ライオン宰相・浜口雄幸である。大西正幹の息子・大西正男は、後に郵政相を務めた。

昭和２年７月 15 日銘「下ノ加江天満宮天災記念碑」、昭和４年１月銘「下ノ加江水害記念碑」（いずれも市指定文化財）の漢文調の格調高い碑文とその字を書している。これは大正９年８月 15 日に発生した豪雨災害により下ノ加江川下流域にて発生した土砂流失について触れている。その惨状と田畑荒廃を地域住民が力を合わせ、耕地整理組合を結成し、昭和初めに見事に復興させたことを顕彰する石碑である（註６）。

引用・参考文献

・足羽潔ほか『高知・ふるさとの先人』高知新聞社、1992 年。
・『土佐清水市史下巻』土佐清水市、1980 年。

註

（註１）足羽潔ほか『高知・ふるさとの先人』高知新聞社、1992 年、370―371 頁。
（註２）前田和男ほか『高知県人名辞典新版』高知新聞社、1999 年、6－9 頁。
（註３）山下隆「四. 教育」（『土佐清水市史下巻』土佐清水市、1980 年、359―363 頁）
（註４）（註１）に同じ。
（註５）（註１）に同じ。
（註６）田村公利編『-土佐清水市域自然災害碑調査-郷土の先人たちからのメッセージ』ジオパーク推進協議会・土佐清水市危機管理課・土佐清水市生涯学習課市史編さん室、2020 年。